

# オオイタドリ

*Reynoutria sachalinensis*

タデ科

## 名前の由来

「イタドリ」は痛みを取る薬効があるといわれ、それより大型だと言うことで名前がついた。方言で、スカンポ、ドンクイという別名がある。また根茎は大きく丈夫なので虎の杖という意味の虎杖根（こじょうこん）という名前もある。漢字名：大痛取、大虎杖



オオイタドリ

## 形態的特徴

巨大で高さ1~3mにもなり、大きな群落をつくる。茎は太く直立し、中心部は空洞になっている（中空）。葉は広卵形で大きく、下面は粉白色を帯びる。雌雄異株で、花は白

色で細かく、枝先や葉の基部（葉腋）に円錐形に群がってつく。雄花は上向きに立ち上がってつくように見えるが、雌花は果時に卵形に大きくなり、垂れ下がる。

## 類似種と見分け方

イタドリ。

オオイタドリより小型で高さは0.7~1.5mほど。オオイタドリの葉は基部が心形で先に向かって少し幅が広くなり、

先端が徐々に狭まっていくのに対し、イタドリでは葉の基部でもっとも幅が広く、先端は急に狭まってとがる。



オオイタドリ。花



オオイタドリ。実



オオイタドリ。コガネムシに葉を食われている



オオイタドリ。葉

## 生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期				■								
結実期					■							

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

草花  
(在来種)

草花  
(外来種)

哺乳類

鳥類  
(水辺)

鳥類  
(草原・樹林)  
ワシ・タカ

## 生育環境・分布

河川敷や道端、堤防、荒地などに大きな群落をつくる。

**分布：**国外分布は、千島、樺太、朝鮮（鬱陵島）。

国内分布は、北海道、本州中部以北。

北海道内分布は、全道。

十勝地方では、河川敷や道端、堤防、荒地などに普通に見られる。しばしば大きな群落となる。

## 生活史

**開花時期：**7～8月 **開花までの年数：**不明

**寿命：**多年草。

## 他生物との関わり

ルリシジミの幼虫の食草となっている。



ルリシジミ。幼虫時、オオイタドリを食草とする



オオイタドリ。若芽は山菜として食される

## 興味深い話

■根茎に薬効があり、地上部が枯れた頃に掘って生のまま小さく切って日干しにし、抗菌、鎮咳、利尿、便秘などに用いるとよいという。打ち身のときに葉をもんではりつけると、痛みが取れるともいう。

■山菜としては5月頃、葉が開く前の若い芽や茎が食べられる。若芽はゆでて水にさらし、あえもの、酢のもの、生のままやサラダにし、若い茎はてんぷらやゆでて煮付けたり、油炒めにするると美味しい。繁殖力がつよいため、たくさん採取できる。

■十勝地方のアイヌ語では「イコクトウ」という。他の地方では「クツタル」とよばれる。本来はイコクツタル（節・多くある・中が空洞の茎）だという。

■北海道の地名「倶多楽」、「屈足」などはアイヌ語のクツタルで、イタドリの群落を意味するという。また胆振地方の虎杖浜も、オオイタドリの根茎を指して虎杖根とよぶことから、オオイタドリが多い浜という意味をもつ。

■繁殖力が強く、しばしば大群落をつくるが、30～40年前から海外でも日本からの帰化植物として問題になっている。特にドイツを中心としたヨーロッパ諸国に帰化し、群落をつくっている。

## 配慮事項

特になし。



オオイタドリ。  
枯れた茎は丈夫で、杖にも使われる

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

### 参考文献

「改訂版 牧野新日本植物圖鑑」牧野富太郎 北隆館 1989

「北海道植物図譜」滝田謙讓 自費出版 2001

「日本の野生植物 草本Ⅱ」佐竹義輔・大井次三郎 他 平凡社 1982

「新版 北海道山菜図鑑」佐藤孝夫・小林隆正・久保秀樹 亜瑠西社 2002

「アイヌ植物誌」福岡イト子 草風館 1995

「新版 北海道山菜実用図鑑」山岸喬・山岸敦子 北海道新聞社

1992

「北海道薬草図鑑 野生編」山岸喬 北海道新聞社 1992

「モーリー5号」(財)北海道新聞野生生物基金編集 北海道新聞社 2001

「北見の蝶」木村辰正 北見市教育委員会 1994

「昭和61年度アイヌ文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅵ)」北海道教育庁社会教育部文化課(編)、北海道教育委員会 1987